

銀杏

発行所

〒792-0835

新居浜市山根町8番1号

曹洞宗瑞應寺専門僧堂

編集発行人 村上 徳 存

電話(0897)41-6563

FAX(0897)40-3127

毎月1日発行

(振替 01330-2-31918)

瑞應寺

印刷所 東田印刷株式会社

通元老師を偲んで【最終回】

大本山永平寺副監院
栃木県明林寺住職

西 田 正 法

三月よりお付き合い頂いて参りました『通元老師を偲んで』ですが、通元老師様の一周忌を迎えますこの七月を以て最終回となります。最終回は、厳しくも慈愛に満ちた通元老師の愛語を、私なりに整理して結ばせて頂きます。

道元禪師様の『教授戒文』に「佛と法とを学びしは、乃ち僧宝なり」とのお示しが御座います。僧宝とは僧侶のことです。私は、僧侶として頭を剃り墨染の衣で病院に着きました。到着した直後は、「僧侶Ⅱお葬式」の図式から忌み

嫌われました。ところが、今思えば老師の大慈悲心（三十歳を目の前にして折角修行に來た者を、自分の看病だけさせたのでは本師にも本人にも申し訳ない。病院を修行道場としよう）に拠って、到着早々の一喝で病室を道場に転じ、厳しく、綿密に御指導下さったのです。その様子は、院内でも評判だったようです。その厳しさの一例をご紹介します。お見舞いに見えた方から頂いたカステラがありました。老師が、「おいおい、そのカステラな、等分に切り分けて皆さんにお裾分けして

差し上げえ。その包装紙を包丁で切つて懷紙にして配つたらえー。」そう言われるので、カステラを切り分け、包装紙を割いて懷紙にして同室の皆さんに「老師からお裾分けです」とお伝えしながら配り、老師にも「どうぞ」とベッドのテーブルに置きました。老師は、それを見ると、「おい、お前、懷紙がこんなに大きい必要があるんか？皆さんにこの大きさで配つたのか？この半分もあれば十分じゃろうが!! 勿体ない、半分づつ返して貰つて来い!」と仰る。私は仕方なしに包丁を持って皆さんの懷紙を半分に分け、包丁で割いて回収して歩きました。狭い部屋でのこと、一部始終をご覧の皆さんは、気の毒そうな目を私に向け、その目で「気にしなさんな」と語り掛けて下さいました。ほんの一例です。こんな調子で間髪入れず次から次へと叱られる様子が病院内の噂となつて広がつていつて、「あの若い和尚さんは老師さんに叱られながら毎日毎日厳し

い修行をしているそうだ」となつたのでしょう。「佛と法とを学びしは乃ち僧宝なり」老師に教えて頂きました。「学ぶ」とは（真似ぶ）ことじゃ、仏様がされたように、仏様の（まね）のように、そっくり真似をしたならそれが僧宝じゃ」と。坐蒲も持たずにこのこと病院にやつて來たような心至らぬ修行者ではありませんが、そんな私でも老師が病院を道場と成しての御指導で、厳しく導いて下さることにより、周囲の方々はその様子から「この若い雲水さんは、毎日叱られながら一生懸命お坊さんになる為の修行をしている」と、感じて下さったのでしよう。「仏と法とを学びしは乃ち僧宝なり」葬儀をイメージさせる僧侶から、この世の尊い宝としての僧宝として受け取つて下さるようになったのです。また、私を厳しく御指導下さり、相談に見える方々には慈悲心を発揮される通元老師は、皆さんから院内の大導師として敬愛の眼差しを向けられておら

れました。昭和六十年の五月から六月にかけて大洲市中央病院で実際に起きたことです。同じく『教授戒文』に「和合の功德は是れ僧宝なり」ともあります。仏と法とが和合した僧宝には、和合という功德が現れるのです。老師と私とで始まった院内朝課には最も多い時で二十六人もの方々が集い、老師の元には大勢の方が相談に見え、笑顔になつて戻つて行かれます。その様子をご覧の同室の方々も、まるで自分の事の如く、何処か鼻高々でした。本来の和合の功德は、修行者の上に仏宝と法宝とが和合した状態を言いますが、仏法僧が和合した状態であれば、当然の如く縁起として真の和合の功德が立ち現れて来るのです。通元老師の師家としての大力量が病院の中で展開し、私を、同部屋の方々を、そして病気で苦悩する人々、看病疲れで悩む人達、様々な方々が僧宝の功德としての和合のご縁を結ばれたのでした。当に

「和合の功德は是れ僧宝なり」です。

五月初旬から六月下旬に及んだ通元老師との病院生活でしたが、いよいよ退院を迎え、私が押す車椅子に乗られた老師は、病院のメインホールから中央玄関の車寄せまで来ると、「おい、おい、向きを

間違はなく四十九日でございます」と申し上げると、「大練忌か、そりゃあよう出来た」と、ご満悦でした。

さて『仏遺教経』『仏垂般涅槃略説教誨経』の結び、つまり、釈迦牟尼仏陀御一代の最後の最後の御説法は次のように結ばれています。

「汝達しばらく止れ。また語うことなかれ。時まさに過ぎなんとす。われ滅度せんと欲す。これわが最後の所教誨なり」(橋本恵光老師訓詁)

『仏遺教経』をなぞることで、最後のお言葉を味わってみました。と思います。ご自身の最期を悟って居られた釈迦牟尼仏陀は、最後の弟子として須跋陀羅の得度をし、枕辺に集うお弟子達にご自身亡き後の修行生活の基本となる戒を説かれ、更に「少欲・知足・樂寂・静・謹精進・不忘念・修禪定・修智慧・不戲論」の「八大人覺」をお説きになります。説き終わってから、「私が説いて来た教えに付いて疑う所があれば疾問いなさい。疑いを

懐いたまま諦めてはならない。目の前に師が居られたのに、尋ねることが出来なかったと悔やむようなことがあつてはならない。」と、弟子達の様子を伺いながら三度問い掛けられたのです。しかし、釈尊の説かれた教えを得心していたお弟子は無言でした。すると、激しい修行で目から光りは失いましたが、心眼を開き天眼第一として知られたアヌルダ尊者が、「世尊、仮に月が熱く、太陽が冷たいようなことがあつても、世尊の説かれた教えに疑いを懐く者は一人として居りません」と、釈尊に宣言されます。すると釈尊は、大慈悲心を廻らされ、「汝等比丘よ、私の死で悲悩を懐いてはならない。仮に私が一劫という、限りなく永い時間世に住したとしても、出会った者は必ず滅ばねばならない。会えば必ず別離がある。友よ、汝等は自らを利み、他を利む法を皆具えている。我が亡き後私が説いた教えを践み行い弘めて行く時、私の法身は常に

そなた達と共に在って滅びることが無いのだ。私は今、病を得た体によつて苦しみの中に在る。この病の身は、捨てろべき罪惡のものだ。これを除き捨て去ることは歡喜すべきことなのだ」と説かれ、「世は無常である、修行に専念しなさい」と、弟子達を思い遣るお言葉に続いて、前に挙げた「汝等且く止れ。時まさに過ぎなんとす。われ滅度せんと欲す。これわが最後の所教誨なり」のお言葉となります。

このお言葉の「最後の所教誨なり」は、一般的にはこの最後の晩に説かれた教え全体と捉えるのですが、私は、「時まさに過ぎなんとす」時は過ぎようとしている。「我滅度せんと欲す」私は滅度しよう。「これ我が最後の所教誨なり」《この滅度の事実こそ私の最後の教えである》と、捉えています。釈尊が、最後の最後に示された御教えは、自らが死に逝く姿、つまり、理屈抜きに現された無常・無我の実相だったのではないかと思うのです。

私のような、学者でも師家でもない一介の僧侶が勝手な思い込みでのみで解釈することは許されません。そこで、この思いを駒澤大学の総長をされ、永平寺の西堂もお勤めになられた奈良康明老師、そして駒澤大学の副学長をお勤めになられ、釈尊最後の旅の様子とご説法が説かれた『大般涅槃經』の全てを講じられたご著書もおありの田上太秀先生のお二人に、「私は、仏遺教経の結びのお言葉をこのように読みたいのですが、間違っているでしょうか？」とお尋ね致しました。奈良老師は「その読み方もいいね。間違いないでしょう。あなたの思いでお話したら」と言つて下さり、田上先生は「アッ、そういう見方もいいね。間違っていないと思うよ」と、お墨付きとはいきませんが間違っていないとのことでした。「私の死に逝く姿こそが最後の教えである」だからこそ「さあ、且らくしずかにしなさい。言葉を語ってはならない」

黙って見守りなさい、私の最期を目に焼き付け無常を観きなさい。と説かれたと受け取っています。

通元老師の介護をして下さっていたお弟子の金岡潔宗老師に、ある老師が仰ったそうです。「今、通元老師は、あなたに、老いとは何か、老いとはどういう事を見せて下さっておるんですよ」と。それを聞かれてから、金岡老師は介護することに抵抗がなくなつた、と私にお話下さいました。当に、最晩年の通元老師は、老いという事の現実を身を以て如実にお伝え下さっておられました。そして、「如今安然」と従者と旅立たれました。御一代、四衆の接化に余念無く修行底の中に身を置かれ、数多の禅画や書を遺され、老いては老いをそのまんなま受け入れられ、老いを厭い拒否する風情も無く、縁起として巡り来た老いに任せて計らい無く、更には死をも受け入れ「瑞應寺を宜しく頼む」との合掌のお姿をス

スマートフォン画面に遺されて旅立って逝われました。

「儂の老い、儂の旅立ちの姿をよー見えておけよ」と、お釈迦様のように無言の説法を説かれて旅立たれたのです。

私が老師の行者をしていた当時、四国の淡交会の中でも大変重鎮だった女性の先生がお年を召して入院されたのですが、通元老師がお見舞いよりお戻りになつて、「ありゃー大したものだ！認知症で何も分からなくなつていても、誰が来ても、何を言つても、ただニコニコと『有り難う、有り難う』と言うばかりよ。儂も分からなくなつたらあんなふうがええーのう」と。未だ六十一、二歳であつた老師が仰つておられたのをよく覚えています。その老師がお歳を召して、晩年は合掌で、或いは手を握つて下さり、また片手を挙げられ、「ありがとう」「ありがとう」と、それは穏やかなお顔で仰つて居られました。私のように叱られてばかりだった者にとって、合掌で「ありがとう、ありがとう」と仰つて下さると、

拝まれているようで勿体なく平身低頭して仕舞つたものです。

「胡説乱道」私の世法を木っ端微塵に碎かれ、仏道の厳しさと真の慈悲心を教えて下さり、老いとは何かを見せて下さつた九十七年、旅立ちに臨んで「如今安然」と、縁起の世を縁起の儘に計い無く、自然に旅立って逝かれた老師の有り様を、及ばずながらも慕いつつ真似ぶ姿勢を忘れずに生きて行きたいと願つています。大慈通元老大師の御徳を讃え、通夜説教とさせて頂きます。ご清聴ありがとうございました。

合掌

報恩のつもりで臨みました。が、文字にしてみると赤面の至りでした。最期までご高覧下さいました皆様に御礼申し上げます。また、貴重な紙面の三分の二を五回にも涉つてご提供下さいました瑞應寺さまに厚く感謝致します。

令和四年十月三十一日

大慈通元大和尚 通夜説教より

テレホン法話（〇八九七 四一・〇〇三三）

禅のたより



◆ 天命を知る

「光陰矢の如し」の言葉が身に染みて感じる年になりました。歲月の虚しさというか、残りの人生への焦りというか、五十歳という自分の人生の重みを感じています。

人々はこの年頃になると自分の人生が何のためにあるかを意識するようになるのではないのでしょうか。人生の大きな節目として五十歳という自覚をどのように入れればよいのか、先人たちの智慧から学び参究したい。

孔子は晩年になると自分の一生を回想し、その人間の形成の過程を述べました。

「私は十五歳のとき学問に志し（志学）、三十歳になつて自立し（而立）、四十歳には心に惑うことなく（不惑）、五十歳にして天命を知る（知天命・耳順、（従心・・）と。

ここで、五十歳になつて天命を知るというが、「天命」とはどのようなことでしょうか。

西洋（キリスト教）の思想は、天神（キリスト）との関係を従属的關係、即ち人間は神によつて造

られたもの（被造物）という認識をしています。だから「天命」は生まれたときから定められている運命または天に与えられた使命として多く読まれています。

しかし、東洋（仏教）の考え方は「天地同根万物一体」という禅語が示すように「天地と私は同根であり、万物と私は一体である」という天地人の調和、すなわち縁起的相互依存關係として認識して来ました。

ここで私は「天命」という言葉の意味を次のように説明したい。「天命の天は天道として事物の道理を表わし、命は人道として人間の当為を表わしている」ことです。

それは哲学的観点から言えば、天道は客観世界であり、人道は主観世界になります。そうすると「天命を知る」とは、主・客の關係がわかる、すなわち自分と他者（自分が出会うすべての世界）との共生の生き方が解ることでしょう。まさに聖人（悟り）の世界であると言わざるを得ない。

人間として生まれて「人生山

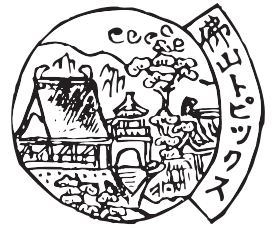
あり谷あり」という様々な経験を積みながら生きています。が、「五十歳にして天命を知る」といったように、仏道を学ぶものとしていまこそ悟りを証得しなければいけないと切実に感じる次第です。

道元禪師も『現成公案』に「仏道をならふといふは、自己をならふなり。自己をならふといふは、自己をわするるなり。自己をわするるといふは、万法に証せらるるなり。万法に証せらるるといふは、自己の身心および他己の身心をして脱落せしむるなり」と示しています。

このように仏道(天命を知る)とは、自分(主)と自分に見られる世界(客)との関係を正しく見ること、さらに主と客の分別を離れることだと言っています。主と客の分別を離れることは、人間の思いを超えた世界で想像も付かないことですが、自己と他己とは違うという認識(人々唯識)をお互い分かち合うことから始まるのではないのでしょうか。

「謹んで参玄(真実に参学する)の人にもうす、光陰虚しく度ることなかれ」

瑞應寺専門僧堂 蔵司 金 範松
令和五年六月一日～十日



般若入

五月下旬より、当地区恒例行事である「般若入」を厳修。作付けの時期に合わせて地域の五穀豊穰・家内安全・身体健全を祈願した。



般若入

富山三十世大慈通元大和尚納骨

六月七日(水)、午後一時より山内役寮大衆、当山総代会が参列し金岡監録導師のもと法堂で報恩諷経、その後、寂光苑にて納骨安位諷経を厳修。

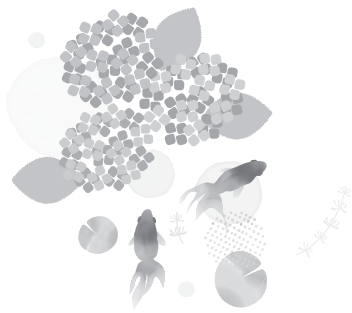


六月の日鑑

- 一日 祝禱
- 四日 日曜参禅会
- 六日 参玄会(八日迄)
- 七日 大慈通元大和尚納骨式
- 十五日 祝禱・略布薩
- 十六日 護持会総会
- 十八日 観音講・勉強会
- 廿一日 ヘルモニ合同慰霊祭
- 卅日 略布薩

七月の予定

- 一日 祝禱
- 二日 日曜参禅会
- 三日 大慈通元大和尚小祥忌速夜法要
- 三日 大慈通元大和尚小祥忌正當法要
- 五日 参玄会(六日迄)
- 十五日 祝禱・略布薩
- 十八日 観音講・勉強会
- 廿日 首座法戦式
- 卅一日 略布薩



銀杏感謝録

- 鳥取県 松田從郎 殿
- 東京都 片上 学 殿
- 広島県 神原泰子 殿
- 岡山県 禅宗修証会 殿
- 島根県 清光院 殿
- 鳥取県 国分寺 殿
- 広島県 長福寺 殿
- 広島県 運西寺 殿
- 愛媛県 大学堂眼鏡店 殿
- 長野県 圓福寺 殿
- 秋田県 正乗寺 殿
- 福岡県 高林寺 殿

(令和五年三月十三日受付迄)



鐘声

入制から幾日経ち、初めて迎えた制中の生活様式にも少し順応出来てきたように感じます。修行に専念する期間であることを改めて心に刻み、向上心を絶やすことなく一日一日を過ごして「光陰虚しく度ること莫れ」とのお示しに則した有意義な制中にしようと考えています。七月二十日に控えた首座法戦式に向けて、未熟な身ではありますが、少しでも第一座として相応しい僧侶となれるよう精進していきます。

今夏首座 義晃